Une saison en enfer における *Délires I-Vierge folle* の二重の働き

小　谷　征　生

Une saison en enfer は《Jadis, si je me souviens bien, 〔...〕》で始まる序章に当たる部分から第7章に当たる *Adieu* まで，計8つの部分から構成されており，第3章に該当する *Délires* は *Délires I / Vierge folle-L'Époux infernal* と *Délires II/ Alchimie du verbe* とに分けられている。拙論においては，この第3章第1節に該当する *Délires I/ Vierge folle-L'Époux infernal* を取り上げ，そこに登場する Vierge folle の捉え方，Vierge folle が *Une saison en enfer* 中でどのような働きを担っているのか，に的をしぼって論を進めてゆくことにする。

Une saison では，まず *Mauvais sang*, *Nuit de l'enfer* において，話者《je》は己の地獄堕ちの原因をそれぞれ自己を越えた血の宿命と己が歩んできた過去のうちに探ってゆくのであるが，そのうちにも，にわかにその原因を求められないまま揺れ動く話者《je》の姿が描かれている。しかし，話者《je》は，*Nuit de l'enfer* の最後に，キリスト教世界の中に埋没している者たちの姿をしかと見定め，己には適さないキリスト教世界の外に己にとって真実な世界を創り出すための方途を見出すべく，もう一度生活の方へ向かうことにする。

> Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités.[1]

これら2つの章の後に置かれているのが，今回取り上げる *Délires I* ということになる。この *Délires I* に登場してくる人物が Vierge folle であり，この登場人物の捉え方には大別して二通りのものがあるといえよう。第一のものとしては，Vierge folle をヴェルレーヌに結びつけようとするものである。その一例として，取り敢えず，S. Bernard のものを

---

(1) *Nuit de l'enfer*, Rimbaud, *Œuvres complètes*, Edition établie, présentée et annotée par Antoine Adam, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1972, p. 101.
拙論において，ランボーの作品からの引用はすべてこの版に依った。以下この版からの引用は *O.C.* で示す。

挙げておく。

> Il ne fait de doute pour personne à l'heure actuelle que la《Vierge folle》est Verlaine, et que l'《Époux infernal》n'est que Rimbaud, qui est ainsi présenté par lui-même tel qu'il apparaissait à Verlaine.[2]

こうした解釈は作品外の実生活の側面に余りにも依拠したものであり，作品外の諸事実(?)を無媒介に作品の中にもち込んだものに過ぎない。尤も，この節にはベルナールが指摘するようなヴェルレーヌとの共同生活を思わせる表現がないではない。しかし，それらはそのように思って読めば読めなくもないといった表現であり，捜し出すことの方がむしろ困難であるといった程にしか書かれていないのだから，それをもってVierge folle＝ヴェルレーヌとするのは甚だ無謀な解釈だと言わざるを得ない。

第二のものは，Vierge folle と L'Époux infernal とをランボーの2つの魂と捉えるもので，これは Marcel A. Ruff によって示されたものである。彼はその著書*Rimbaud*の中でVierge folleをヴェルレーヌとする解釈を批判しながら，次のように言い切る。

> 〔...〕 L'importance donnée à *Vierge folle* sans article, dans un ouvrage qui, d'un bout à l'autre, est une méditation de l'auteur sur lui-même, ne permet pas de supposer que ces mots se rapportent à un autre personnage. Ils ne peuvent qualifier et définir que Rimbaud. *L'Époux infernal*, avec l'article, doit à première vue, annoncer un épisode dans l'existence de celui qui était《Vierge folle》.[3]

> 〔...〕 Une seule interprétation rend compte, à mon sens, du texte entier: celle qui fait de la Vierge folle l'âme du premier Rimbaud, soumise et tournée vers Dieu, mais qui, comme dans la parabole, n'avait pas la réserve d'huile suffisante, et qui est maintenant entraînée par le Rimbaud libéré, devenu pour elle l'Époux infernal.[4]

---

(2) *Œuvres de Rimbaud,* sommaire biographique, introduction, notices, relevé de variantes, bibliographie et notes par Suzanne Bernard et André Guyaux, Garnier Frères, 1981, p. 467.

(3) Marcel A. Ruff, *Rimbaud,* Hatier, 1979, p. 173—p. 174.

(4) *ibid.* p. 175.

リュフのこの解釈は，Vierge folle がマタイによる福音書の「10人の乙女」から取られたとする点では興味深いが，「神に従い，神の方を向いていた」詩人の魂とこのVierge folle を重ね合せるというのは無理があるのではないだろうか。確かに，詩人がキリスト教世界とは無縁の世界に出てゆくことを企図しているとした上で，深い信仰を抱いていた頃の自分をVierge folleとし，彼女の目から見た現在の自分＝L'Époux infernal がいつの日にか他の世界に消えて行くことになると解釈してゆけば，詩人の企図が成就されることになる，という点では一応の説得力を持ち得ようが，こうした読みが可能になるには，Vierge folleが徹底して神に従っていることが条件になってくるのは言う迄もない。しかし，彼女の台詞からはどうもそのような姿は想像し難い。なるほど，神の前での告白という行為からは神に従っているということが理解できるが，後に見てゆく様に，告白の中味は神に従っている者のそれではないであろう。このあたりは非常に微妙なのだが，少なくとも，骨の髄から神に従っているとは言えないのだ。この点で，深い信仰を抱いていた頃の詩人の姿を彼女に重ね合せるのには無理があろう。また，どうして詩人は嘗の己に女の姿を与えねばならなかったのだろうか。この点は少しも明らかではない。最後に，リュフも作品外の事実から作品の解釈を始めるのではなく，作品そのものから作品の解釈を始めるべきなのではないだろうか。私たちに，マタイ書の「10人の乙女」の情報を提供してくれたのは他でもないリュフなのだから。

では，一体Vierge folleとは何者なのか，ヴェルレーヌでも詩人の魂でもないとしたならば。リュフの指摘からわかるように，これはマタイ書の第25章第1節～第13節に見られる「10人の乙女」の譬話に登場する乙女の一人であるようだ。マタイの中では，10人の乙女が花婿を迎えに行く際に，その中の5人は予備の油をランプといっしょに持って行くが，残りの5人は持って行かなかった。花婿の到着が遅れ，ランプの油がきれてくる。賢明な乙女たちは予備の油を使うが，愚かな乙女たちは油を買いに行かなければならなかった。その間に花婿が到着し，賢明な乙女たちは花婿と共に宴会場に入るが，愚かな乙女たちは閉め出されてしまう。マタイでは，勿論，人の子イエスを迎える際の例として10人の乙女が登場してくるのだが，*Délires I* ではこの中にでてくる愚かな乙女の1人が選び出される。つまり，神に見放された乙女の1人を地獄に堕ちたものとして，L'Époux infernal に引き受けさせるのだ。マタイでは，閉め出しを喰って以降の彼女たちには当然触れられていない。そうであればこそ，神から見放された彼女たちの1人を地獄に堕ちたものとした上で，L'Époux infernal と結びつけ，マタイが終止符を打ったところから物語を始めているのだ。だから,中心人物がVierge folleであり，L'Époux infernal は専らVierge folle を通してその姿を覗かせるのである。これが物語である以上，L'Époux infernal が詩人自身であると言い切るのはさしひかえるべきだが，彼が詩人に限りなく近い人物であると捉えることはできよう。従って，この物語を書くことによって，Vierge folle の目から L'Époux infernal を見ることによって，己を異化していることになる。

物語はその幕明けを告げる《Écoutons la confession d'un compagnon d'enfer》の言葉に続き，Vierge folle の告白という順序になる。マタイの続きがここから展開されていくことになる。というよりも，マタイのパロディが展開されていくのである。但し，ここで注意しなければならないのは，告白するのはVierge folleと女であるのに，《un compagnon》となっていることだ。もし，この「地獄の道づれ」がVierge folleを指すのであれば，ここは《un compagnon d'enfer》ではなく，une compagne d'enfer となって然るべきところだ。だから，《un compagnon d'enfer》とはVierge folleではない。また，明らかに L'Époux infernal でもない—L'Époux infernal は Vierge folle の口からしかその姿を現さないのだから。そうすると残るは詩人ということになる。これはどういうことかと言うと，詩人が物語の開始を知らせることによって，以下に続くVierge folleの告白があくまでも虚構であること—マタイ書の乙女たちも実在の人物ではないが—，Vierge folleが告白していようとも，それは詩人が告白していることに等しいのだということを明示したものなのである。「地獄に堕ちるのは何も男に限ったことではないだろうよ。女だってそうなるかも知れないさ。ことによると，女の方が何かこのすごいことをしゃべってくれるかも知れないぜ。だから，地獄に堕ちた女をでっち上げて，そいつに思いのたけしゃべらせてみるから，ひとつ聞いてみてくれよ。」といったところだろう。

> Écoutons la confession d'un compagnon d'enfer :
> 《Ô divin Époux, mon Seigneur, ne refusez pas la confession de la plus triste de vos servantes. Je suis perdue. Je suis soûle. Je suis impure. Quelle vie! 〔...〕
>
> 《Je suis esclave de l'Époux infernal, celui qui a perdu les vierges folles. C'est bien ce démon-là. Ce n'est pas un spectre, ce n'est pas un fantôme. 〔...〕[5]

Vierge folle の告白から窺い知れるのは，彼女はもともと「聖なる夫」に身を委ねるはずだったのだが，地獄堕ちの憂き目にあっているということだ。マタイ書では愚かな乙女たちは自分たちに周到さがないため門外に放り出される。言い換えると，そのような迂闊な者は中に入れるわけにはいかないとして，主が彼女たちを放り出したわけだ。ところが，この物語では彼女たちを地獄に堕したのは L'Époux infernal ということになっている。このことから詩人の目論見が窺い知れよう。Vierge folle が主に対する告白の中で，自分を閉め出した本当の相手に，自分を地獄へ堕したのは L'Époux infernal だと言う時，そ

---

(5) *O.C.*, p. 102.

の告白を聞く主にとってこれはこの上ない皮肉となるはずである。これを「そうか，そうか，……」と聞いている主の姿など想像できないだろう。この種の皮肉をVierge folleの告白に入れることが対キリスト教の側面での詩人の狙いである。逆に，Vierge folle にしてみれば，思うままを口にしてみたものの，それが皮肉以外の何物でもないことに気付いていないこと，さらにこの物語を通じてVierge folle が主の面前でL'Époux infernal を持ち上げること，つまり，自分の告白が主への冒瀆になっていることに気付いていないこと，これらがこのVierge のfolle たる所以であろう。

リュフの指摘をもとに，このように読んでいった時，詩人と女性とを結びつけることに，疑問が生ずるかも知れない。ランボーの実生活を見渡す時，そこに姿を現す女性は数少ない。しかし，彼が女性に全く関心を示さないのならばいざ知らず，『Voyant の手紙』には次のような女性に対する独特な思い入れがある。そこには生活の具体性などひとかけらもないのだから，これこそランボーの女性観であると大上段に構えるべきではないが，『Voyant の手紙』に見い出されるという点，そして彼がそれへの到達を希求してやまなかった未知なるものと女性とを結びつけている点は重要である。

> L'art éternel aurait ses fonctions, comme les poètes sont citoyens. La Poésie ne rythmera plus l'action; *elle sera en avant!*
>
> Ces poètes seront! Quand sera brisé l'infini servage de la femme, quand elle vivra pour elle et par elle, l'homme,—jusqu'ici abominable,—lui ayant donné son renvoi, elle sera poète, elle aussi! La femme trouvera de l'inconnu! Ses mondes d'idées différeront-ils des nôtres?—Elle trouvera des choses étranges insondables, repoussantes, délicieuses;nous les prendrons, nous les comprendrons.[6]

こうした見方がL'Époux infernal の台詞の下敷きにされているのは明らかだ。

> Il dit: "Je n'aime pas les femmes. L'amour est à réinventer, on le sait. Elles ne peuvent plus que vouloir une position assurée. La position gagnée, cœur et beauté sont mis de côté: il ne reste que froid dédain, l'aliment du mariage, aujourd'hui. Ou bien je vois des femmes, avec les signes du bonheur, dont, moi, j'aurais pu faire de bonnes camarades, dévorées tout d'abord par brutes sensibles comme des brûchers..."[7]

---

(6) *O.C.*, p.252.

(7) *O.C.*, p.103.

先に見たような女性を見る目を持つ者が，19世紀の市民社会で生活を送る大部分の女性に，こうした判断を下したとしても，それは止むを得ぬことだ。その大部分の女性の中に入れないのがVierge folleに他ならない。彼女は単に神から見放されたということで，L'Époux infernalの同伴者となっているのではない。同時に，「未知なるものを見出す」女性に近い存在であるから，彼の同伴者になっているのだ。それというのも，彼女が可成鋭い観察者であるから，換言すれば，他ならぬ彼女がL'Époux infernalの行為—ここでは詩人の文学的営為に等しい—に本質的な疑いを投げかけ，否定してしまうからである。

> Je voyais tout le décor dont, en esprit, il s'entourait; vêtements, draps, meubles : je lui prêtais des armes, une autre figure. Je voyais tout ce qui le touchait, comme il aurait voulu le créer pour lui. Quand il me semblait avoir l'esprit inerte, je le suivais, moi, dans des actions étranges et compliquées, loin, bonnes ou mauvaises : j'étais sûre de ne jamais entrer dans son monde. A côté de son cher corps endormi, que d'heures des nuits j'ai veillé, cherchant pourquoi il voulait tant s'évader de la réalité. Jamais homme n'eut pareil vœu. Je reconnaissais,—sans craindre pour lui,—qu'il pouvait être un sérieux danger dans la société.—Il a peut-être des secrets pour *changer la vie?* Non, il ne fait qu'en chercher, me répliquais-je.[8]

ここでVierge folleは《comme》以下の条件法の使用によって，L'Époux infernalの創造行為に本質的な疑いを投げかけた後[9]，彼の課題＝詩人の最大の課題である《*changer la vie*》を《Non, il ne fait qu'en chercher,〔...〕》と否定してしまう。このVierge folleの言葉は，次節 *Délires II-Alchimie du verbe* に引継がれ，詩人が自己の詩作の否定を語っていく。

従って，Vierge folleとは，*Nuit de l'enfer* の最後で地獄からぬけ出る糸口を摑んだ話者《je》と *Délire II-Alchimie du verbe* において詩作の否定を語ってゆく話者《je》とを媒介する働きを担っているといえる。キリスト教世界からの脱出と絡めて詩作の否定の方へと物語を展開してゆくために，一方で神に見放された女として聖書の『10人の乙女』から愚かな乙女を1人取り出し，聖書の終ったところから物語を始めることで聖書のパロディ化を行う。他方，その乙女に「未知なるものを見い出す」女性を重ね合わせて詩作の否定に向かう。このように，Vierge folleは二重の働きを担わされているのだ。

---

(8) *O.C.*, p.104.

(9) Margaret Davies, *Une saison en enfer d'Arthur Rimbaud, analyse du texte*, Archives des Lettres Modernes, Minard, 1975, p.64—p.65.

詩作の否定は次節において徹底的に行われるが，キリスト教の否定は，先にも触れたように，イロニーの形をとって行われる。

《〔...〕 D'ailleurs, je ne me le figurais pas avec une autre âme: on voit son Ange, jamais l'Ange d'un autre,—je crois. J'étais dans son âme comme dans un palais qu'on a vidé pour ne pas voir une personne si peu noble que vous: voilà tout.[10]

《Un jour peut-être, il disparaîtra merveilleusement; mais il faut que je sache, s'il doit remonter à un ciel, que je voie un peu l'assomption de mon petit ami!

Drôle de ménage![11]

上の引用のうち前者はイロニーというよりは罵倒といった方がよさそうな性質のものである。L'Époux infernal は Vierge folle にとっては地獄にいてもなお天使—自分が信じるにたる，そして頼るにたる存在—なのだ。そうであればこそ，Vierge folle が主を《〔...〕 pour ne pas voir une personne si peu noble que vous: 〔...〕》と罵倒したとしても，それは一つの理屈になり得る。後者はあたかもキリスト昇天を思わせる表現だが，le ciel ではなしに，《un ciel》となっていることに注意を払う必要がある。これは所謂天国といったものではない。そんなものではないのだが，Vierge folle が L'Époux infernal を自分の天使と呼ぶ以上，天使の戻る所は天国以外には考えられないから，《ciel》という単語は使ってはいるが，所謂天国といったものから区別するために，不定冠詞《un》を冠しているのだ。「天国に召されますように，とお祈りする人たちは勝手に祈ればいいんですよ。あの人にはキリスト様の天国なんていりゃしませんよ。」といったところだろう。要するに，台詞全体がキリスト昇天を思わせながらも反キリストのイロニーに終始しているわけだ。但し，天国に帰ってゆくのはあく迄も条件であり，確定事項ではない。ここを取り違えてはならない。Vierge folle にしてみれば，「あの人が天国に帰っていくとしたら，それはキリスト様の天国とは違うだろうし，実際にあの人が天国に帰ってゆくかどうかも，あの人に天国が相応しいかどうかもわからないんですから。」といった意味を《〔...〕 s'il doit remonter à un ciel, 〔...〕》に込めているのだろう。

しかし，L'Époux infernal にしてみれば，このように自分のことを想ってくれる Vierge folle であっても，いや，そのように想ってくれるから，終生を共にする相手には見えない

(10) *O.C.*, p. 104.

(11) *O.C.*, p. 106.

ようだ。というのも，L'Époux infernal はあく迄キリスト教世界から出ることに固執しているからだ。

〔...〕 Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour[12].

さらに，次のように語る。

"Tu vois cet élégant jeune homme, entrant dans la belle et calme maison: il s'appelle Duval, Dufour, Armand, Maurice, que sais-je? Une femme s'est dévouée à aimer ce méchant idiot: elle est morte, c'est certes une sainte au ciel, à présent. Tu me feras mourir comme il a fait mourir cette femme. C'est notre sort, à nous, cœurs charitables..." 〔...〕[13].

ここに出てくる《Duval》《Armand》という名前は，デュマ・フィスの『椿姫』に登場するArmand Duvalを暗示しているとの指摘がある[14]。『椿姫』では娼婦マルグリット・ゴーティエがアルマン・デュヴァルという名の青年に身も心も捧げるが，デュヴァルの父親が二人の仲を裂く。結局，マルグリットはデュヴァルに捨てられ，胸を患った挙句死んでしまう。L'Époux infernal の考えでは，彼と Vierge folle との関係はその逆になる—《Tu me feras mourir comme il a fait mourir cette femme.》がそのことを示している。「椿姫」ではマルグリットがアルマンとの生活を望むものの—《entrant dans la belle et calme maison》がそれを暗示していよう—それを果せなかった。それと逆であるということは，L'Époux infernal には Vierge folle との生活は，彼がこの世界をぬけ出そうとしている以上，足枷になる。市民社会の外にいた娼婦マルグリットが安定した市民社会での生活を望んだように，Vierge folle もそう望むであろう。そうなれば，L'Époux infernal がその望みを実行に移す際に，彼女が障害になってこよう。望みが己の存在に関わってくる以上，実行できないということは死に等しいものになってくる。ここに，現実にこのキリスト教世界からぬけ出すことを企図している詩人のもっている一種の断念にも似た認識が顔を出す。その認識とは「未知なるものを見出す」女性とは詩人の想像の域を出るものではないというものだ。そして，この認識が顔を出してきた時，この物語は終りを告げることになる。

---

(12) *O.C.*, p. 105.

(13) *O.C.*, p. 105.

(14) *Œuvres de Rimbaud,* Suzanne Bernard et André Guyaux, Garnier Frères, 1981, p. 469.

こうした認識は物語を書き進めているうちに詩人が得たものではなく，物語を書く前に，すでに詩人のものになっていたはずである。だから，詩人は他の形式をとらずに，告白という形式をとったのである。もちろん，すでに述べたように，告白という形式をとることによって，詩人は聖書のパロディ化を行い，その中にイロニーをばらまきもした。しかしここでもうひとつ詩人の目論見が浮び上ってくる。それは，このイロニーに満ちた告白を神が受け入れるかどうかを試すものなのである。そこには，「神よ，あなたはこのような告白をする女をとてもお許しにはなりますまい」といったこの詩人の底意地の悪さが隠されている。こうした意味が，物語の中で告白するのはVierge folleであるのに，物語の始まりを告げる《Écoutons la confession d'un compagnon d'enfer》において使われている《la confession》という単語に含まれている。すなわち，Vierge folle の告白は詩人の告白に等しく，その告白はキリスト教的告白に対するアンチ・テーゼであることが，《la confession》に含まれているのだ。

以上が*Délires I*の骨組みであるが，この節を中に入れることによって，*Une saison en enfer*は，対キリスト教の側面で，*Nuit de l'enfer*から一段と大きな盛上りを見せている。一方，この節で現れた創作行為への疑いは，次節*Délires II*において決定的な展開を見せることになる。